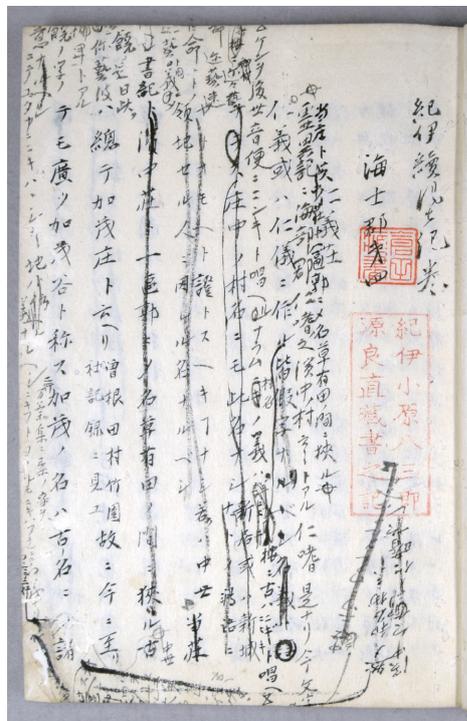
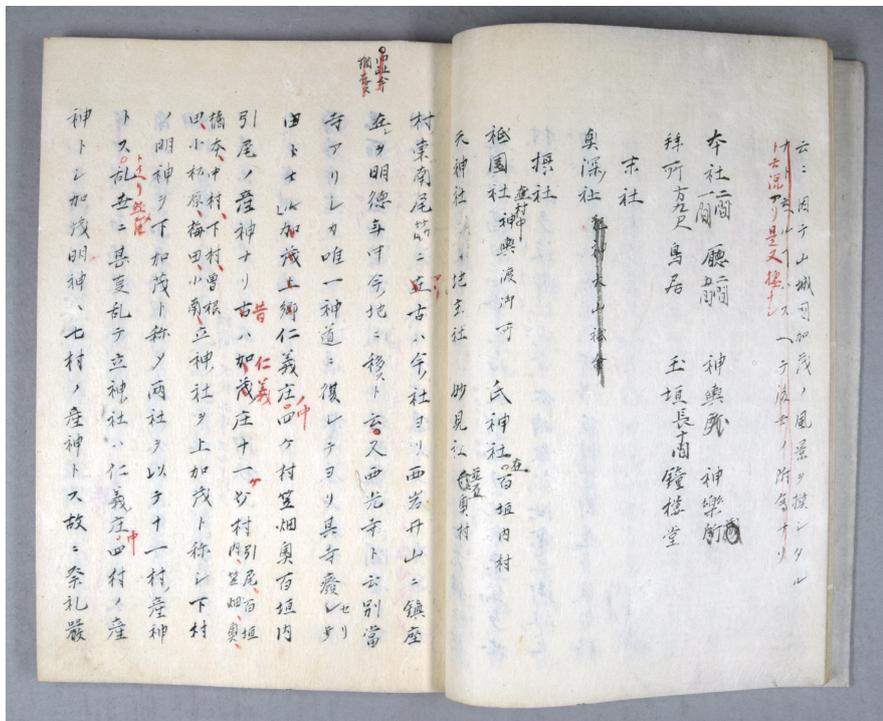


と な み の き 門 水 之 紀



資料紹介

紀伊続風土記稿本 零巻(巻24[海部郡仁義荘] ^{おはらよしなお} 小原良直・^{いさお} 倉田績旧蔵)

[文化十二年[1815]]写、一冊。23.4×16.3㎝。

墨・朱筆の書き入れは天保二年[1831]頃か。



本書は、仁井田好古総裁の下、天保十年(1839)十一月に完成した『紀伊続風土記』巻24相当巻(原表紙中央に「仁義荘」と墨書)の稿本である。その本文は、毎半葉9行の浄書本文に対し、墨色からして数次に互る書き入れ、朱筆の書き入れが行なわれたもので、和歌山県立図書館蔵『続風土記』原稿(明治43年刊本の原稿)に比して、各村の掲載順序が異なること、全体的に情報量が多いこと、本書に書き入れられた記載が原稿の本行・割注に反映されていることが指摘できる。また、内題に巻数を記さない(「紀伊続風土記巻/海土郡第四」)、「家数、人数」にその数字を記さないなどの特徴がある。この点、共通するのが、渡辺広「紀伊続風土記についての二、三の考証一解題にかえて一」(『紀伊続風土記』復刻版解題小冊子、1991.11)の指摘した和歌山県立図書館蔵『紀伊国続風土記原稿(山東荘)残本唯一綴』なる一書である。渡辺論考は、『残本唯一綴』について、編纂事業が一時中断された文化十二年(1815)以前の調査に基づいて記された原稿に、事業が再開された天保二年以後、書き入れが行なわれたものと見るが、本書の成立事情についても同様の経緯を想定することが可能であろう。その点、本書には、編纂事業において「物産」を担当したとされる小原良直の蔵書印が捺され、編纂過程におけるある段階の状況を示す史料であるという推定を強くする。なお、巻首・表紙には、明治43年(1910)版『続風土記』跋文を著した倉田績(1827-1919)の蔵書印が見える。

(大橋直義/中世日本文学・文学学)



徳川吉宗と紀州に残された痕跡(史料)

藤本清二郎／歴史学(和歌山大学 名誉教授・紀州研 教育研究アドバイザー)

筆者は『紀州藩主・徳川吉宗』(吉川弘文館歴史文化ライブラリー)を2016年に刊行した。江戸幕府第8代将軍吉宗に関する研究、図書は多いが、それは将軍以前は、単なる前史(前置き)であり、伝記、伝聞資料によっていた。筆者は一次史料によって紀州吉宗の個人史を書こうと思った。そのためには新史料の発掘が必要であった。

新しい史料はまず本研究所所蔵「三浦家文書」の中にあった。「家乗」「年中日記」に源六・新之助(いずれも吉宗)に関する多くの記事を見つけることができた。これまで、吉宗という名で登場しなかったから注目されなかった。また「和歌御宮」(東照宮)へ常時参詣しており、別当寺である雲蓋院の「公用日記」にも源六は登場した。筆者は幸い雲蓋院文書全点を和太赴任後まもなく撮影していた。

これらの史料を基に小論を書き、史料を紹介した。新発見史料の圧巻は「公方様御成之節覚書」である。これまで『南紀徳川史』では、将軍綱吉が江戸の紀伊家屋鋪お成りの際、3番目の吉宗は格外で、別室にいた。老中大久保某が「もう一人御子が…」と助言し、御目見えできたと伝えられている。しかし、上記「覚書」は接待準備の責任者家老三浦為隆が作成した事務方のシナリオで、ここには吉宗を別扱する記事は一切ない。

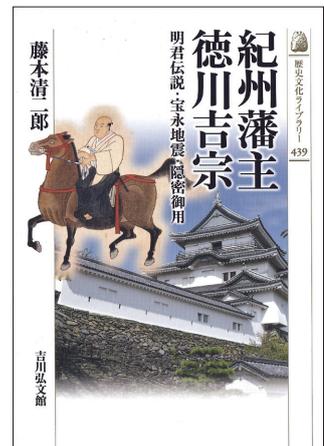
ここまでは四半世紀以前の話である。2016年春に著書執筆にかかったのであるが、さらに新史料に辿り着いた。前出「年中日記」には藩主等の参勤・帰国の記録があり、吉宗が3万石大名の時、上方街道(熊野街道)を通行したことがわかっていたが、偶然手元にあった『泉南市史』をみれば、口絵写真に信達宿角谷家の式台が写っており、そこに「三月晦日 松平主税頭休」との関札(宿札)が置かれていた。この関札は元禄12年(1699)吉宗参勤時のもので、それを告げに角谷家を訪れると、「往来御用留書」等の史料に出会った。吉宗の元禄16年参勤時、山中峠で猪狩り、信達宿で酒盛りの様子が記されていた。参勤日程が決定後、直前に信達宿の役人が準備のため、和歌山城下の兄頼職の家老屋敷を訪問している。屋敷地住所を書いたメモが残されている。吉宗も同様であったろう。

筆者がこれまで取組んできた被差別身分史研究(本職)の史料として解読した「牢番頭日記」(のち『城下町警察日記』)には、元禄15年、留守藩主の代理として主税頭(吉宗)が新設処刑場で、処刑に臨席したという記事がある。将軍着任の直前、吉宗は優れた技量を持つ牢番頭Aを領内「隠密内聞」御用に取り立てようとしたが(将軍就任のため実現せず)、10年前処刑時にAに出会っていた可能性があることに気付いた。

以上は拙著執筆時のことである。その後、吉宗の祖母と母(浄円院)に関する史料に出会い、色々な謎が解けた。和歌浦玉津島社文書の中に冷泉為久・田沼意行等と並んで巨勢至信・巨勢利啓の名が記された紙片があった。この二人は母方従兄弟で、吉宗取立の旗本である。何故玉津島社文書に出て来るのか。一連の名前は将軍吉宗が育成した江戸冷泉歌門の人々であることが後でわかった(久保田啓一氏の近世文学研究)。二人はその後法要等で紀州を訪れている。

この母方系譜の解明には苦勞した。和歌山市内大立寺(祖母の墓石あり)に寛政9年(1798)巨勢筋「諦岳院」百回忌の史料があった。「諦岳院」は吉宗の母方叔父であることが、京都大工頭中井家文書(国重文、「大阪くらしの今昔館」に寄託)によって確認できた。祖母家族は中井家の遠縁であった。この系譜は京都長香寺中井真隆氏のHP記事に指摘があることを後で知った。しかし、祖母・母・叔父の行き倒れ経験については筆者の発見であり、論証は画期的と自認する。…なお続くが、紙面が尽きたので掲筆する。

最後に、一見偶然の発見も実は引き寄せられた必然的結果だと感じた次第である。



紀伊半島のロギオスたち— λόγιος — 紀州研に所属する研究者(ロギオス λόγιος)たちの 研究を紹介します

2005年、Edmonton大会にボランティアとして参加して以来その魅力にとりつかれ、大学院生の頃からずっと追いかけてきたワールドマスターズゲームズ(WMG)。そのWMGが2021年5月に関西(広域連合)で開催される予定となっている。4年に1度、オリンピックの翌年に開催される

この世界最大級のスポーツイベントは、おおむね30歳以上という年齢条件さえクリアしていれば誰でも参加できる(競技歴が無くても参加可能)究極のオープンスポーツイベントである。新型コロナウイルス感染症の影響により延期の可能性も高くあるが、いずれにせよこのスポーツイベントの運営に携わっていることがとてもうれしく、楽しみでならない。

ボランティアで参加したWMG 2005 Edmontonでは、70歳以上の方々がバスケットボールの試合で跳んで走っている姿をみて、とにかく感動した。2013年のTorino大会では、90歳を超えた日本人の女性スイマーの100m平泳ぎを見て、まさに開いた口がふさがらなかった。2017年のAuckland大

買い物をした店で、店員に「ありがとう」と声をかけて出ていく…、そんな光景を関西ではよく見かけます。しかし、東日本では同じ場面で「ありがとう」と言う人はまずいません。どんな時、誰に対して「ありがとう」と言うのかには、実は明確な地域差が存在しています。

このような「日本人の言語行動の地域差」をテーマに、私は近年研究を進めています。「人に会ったら挨拶をする」、「何かしてもらったら礼を言う」というように、人は場面や状況に応じて、さまざまな意図や意思を表現していて、単に言葉の違いだけでなく、こうしたコミュニケーション全般を扱うのが言語行動の研究です。

私自身は東北の出身で、関西在

オトナのスポーツ・フォー・ライフ



会には初めて選手として参加、大学部活以来の「勝ちたい」という思いで本気で競技し銅メダルを獲得、チームメイトである大学教員の先輩先生方とうれし涙で抱き合ったことが今でも忘れられない。オトナになってからも、勝ち負けを争うこと(それ自体)を楽しむマスターズスポーツが私の研究テ

ーマの1つであり、その醍醐味と楽しさについて、生涯スポーツに関する教科書や講義、講演等で幾度となくマスターズスポーツとワールドマスターズゲームズのことを発信してきたが、ここまで自分(と自分たち)にとって、大きく深い体験になるとは、知るよしもなかった。さまざまな世代やさまざまな国の人たちとスポーツを通して、またスポーツの前後で交わることで、スポーツの楽しさも考え方も多様であることを肌で感じ取ることができ、その可能性や期待をますます抱くようになった。スポーツをきっかけにさまざまな人と文化と交わることの大切さを、今まさにこのような状況下にあるからこそ、強く感じている。

(彦次 佳/スポーツ老年学)

ものの言いかた西東



住10年になりますが、こちらの言語行動に慣れるまで、数多くのカルチャーショックを受けました。皆がバスの運転手に「ありがとう」と言ってバスを降りていくのにも初めは驚きました。こうした体験などから、単に言語行動だけではなく、言葉に対する態度や発想そのものに東西差があると考えに至り、その研究成果を『ものの言いかた西東』(小林隆氏との共著)にまとめました。「東北の人間は無口で何考えてるかわからん」、「なんで東京の人間は、ボケてもツッコんでくれへんのや」と一度でも思ったことのある方、ご一読いただけましたら、こうした長年の疑問が解消することと思います。

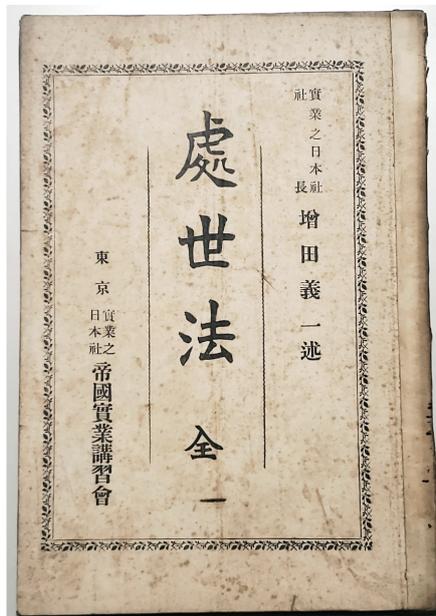
(澤村美幸/日本語学・方言学)

「人に使はれてゐる者は、眼上の者に對して服従するといふことを忘れてはならぬ。如何なる場合如何なる命令に遭つても、眼上の者に對しては常に従順にそのいひつけに服するといふ精神が大切である」。これは写真に掲載されている増田義一の『処世法』（発行年は現在調査中）である。現代人がこの記述を読めば、パワーハラスメントなどを連想しそうであるが、戦前期日本では、立身出世や処世を合言葉に、このような言説が多く存在した。

戦前期の日本では都市化の進展とともに、東京や大阪などの大都市で生まれてここで教育を受ける人々が新たに登場した。他方、農村で生まれた者は、農村で生涯を過ごす者もいたが、大学や実業専門学校への入学、就職のために、大都市や地方都市に移動する者もいた。

大学へ入学するためには、中学への進学が前提となった

戦前期日本の社会移動の多様性



が、多くの農村出身者は尋常小学校(高等小学校2年程度修了を含む)を最終学歴とした。とりわけ、私の専門分野とする近代日本経済・経営史では、資産家や名望家などが地方の工業化に果たした役割が盛んに研究されているものの、農村から都市へ移動した者は工場労働力として工業化に寄与したことが自明視されている。

しかし、数多くの伝記・人物伝を読めば、農村から都市へ移動した者のなかでも、創業者として事業に成功する者もいた。家庭状況で中学進学を断念した者がどのようなルートを通して成功を収めたのか、こうした戦前期日本の社会移動の多様性の研究を現在進めて

いる。その時、彼らのモチベーションになったのが、この『処世法』などに記されている言説であったと思われる。

(長廣利崇／経済史学)

2020年、コロナウィルスの影響により、日本だけでなく、世界中のさまざまな祭り／祭礼／フェスティバル／イベントといった類はことごとく、中止や延期が相次いでいる。日

本でも例外なく祭り／祭礼のほとんどが神事を除いて中止となっている。疫病退散を願う御霊会ごりょうえを起源とする祇園祭などの夏祭りも中止され、祭り／祭礼を行なう基盤となっていた「信仰」面の消失が顕著となり、現代社会での祭礼の「あるべき姿」を如実にあらわしているといえよう。

そもそも戦後から高度経済成長期、1992年のお祭り法(地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律)施行を経て、大型祭礼の観光化が図られ、盛大に催されるようになっていった。さらに近年の外国人誘致によるインバウンド収益などがそうした祭礼の経済面での下支えになることで、さらなる祭

コロナ禍のなかでの祭り・行事



【左】初盆の盆棚、【中】初盆の精霊船、【右】精霊流し
(すさみ町周参見(2020年8月15日))

礼のイベント化が進展している。こうした背景には敗戦による「信仰」面の排除や科学・医療技術の発展がある。現在では文化財指定でも「信仰」面以外の「芸能」

面のみを指定することが基本となっており、コロナ禍が一段落したのち、こうした祭り／祭礼がどのように変化するかは今を生きる我々にかかっているといえよう。

ただし、家々で行なわれる行事はコロナ禍でもしっかりと行なわれている。紀南一体で8月15日に行なわれる精霊流しはコロナ禍で中止となった花火大会とは別に行なわれ、家単位での「信仰」が生きている証拠となっている。自治会等の地域コミュニティが形骸化・崩壊することも多くあるなか、最後に残る「信仰」は、身近な「先祖供養」といった家単位の「信仰」なのかもしれない。(吉村旭輝／芸能史学)

プロメテウスがもたらした火、とくに灯火は、人類の安全を向上させ、長時間の活動を可能にした。ゆえに人類は灯火を維持するために、様々な工夫を凝らしてきた。

ファラデーの「ロウソクの科学」で知られるように、ロウソクはその手段として代表的なものの一つである。現在のロウソクは石油由来のパラフィンを使用しているが、歴史的には様々な原料が利用されてきた。日本でも近世には漆や檜の実を使用した樹脂ロウソクが利用された。

檜および檜蝋の産地としては福岡や愛媛が著名である。和歌山では紀州藩の殖産政策の一環で、薩摩での精糖技術調査を命じられた田中善吉が持ち帰った檜実の植え付けから本格的な栽培が開始された。

田中は、紀北から紀中の6郡で栽培を指導した。栽培

檜栽培の復活を目指して



斜面での檜の実の収穫の様子
(2019年12月 有田川町にて著者撮影)

は軌道に乗り、ブドウ檜という新種が生み出されるほどであった。とりわけ有田川流域南岸諸村での栽培は大規模であったといわれる。近代になっても山間部の平地が少ない地域で栽培が盛んに行われたが、第二次世界大戦下の食糧増産で伐採された。

戦後も工芸作物・特用林産物として栽培が細々と継続されたが、栽培は減少の一途を辿り、もはや廃れたものと考えられた。そのような中で、2019年地元の高校生がブドウ檜原木の再発見というニュースがもたらされた。これを機に、地元の自治体・住民により檜栽培復活の動きがみられている。本学も産業利用を含めた調査・研究での協同・支援への取り組みをはじめた。燃える火のように美しい檜の紅葉をみることのできる日の復活を目指して。

(藤田和史／経済地理学)

前期授業報告 わかやまを学ぶ

新型コロナウイルス感染拡大により、5月7日の授業開始にあたって、すべての科目が遠隔授業で実施することになりました。紀州研所員によるリレー講義「わかやまを学ぶ」は、学習管理システム・Moodleにオンライン教材を提示することを基本とし、毎回、授業内容の理解度を確認する試験を実施しながら進めました。受講者数は173名でした。

全13回の内容と担当者は以下の通りです(敬称略)。人文・社会・自然科学にまたがる幅広い視点から「わかやま」が持つ特性や抱える課題について理解を深め、授業で提供された話題の中から受講生自身の琴線に触れる「わかやま」を探し当ててもらうことをめざしました。広範なテーマを反映して、毎回のオンライン教材は写真、映像、史資料、図表、統計データ、音声データなどバラエティに富んでおり、リレー講義の強みを活かすことができたのではないかと考えています。(西倉実季／社会学)

- 第1回 わかやまの文化財と物語(教育学部・大橋直義)
- 第2回 干潟の役割、そこに見られる豊かな生き物とその生態(教育学部・古賀庸憲)
- 第3回 和歌祭とわかやまの祭礼の特色(紀州研・吉村旭輝)
- 第4回 和歌山から世界へ―海を渡った和歌山県人(観光学部・東悦子)
- 第5回 紀伊半島における民家と石垣の地域性(システム工学部・平田隆行)
- 第6回 和歌山の鯨と観光(観光学部・吉田道代)
- 第7回 わかやまの農業に触れる(教育学部・荒木良一)
- 第8回 反逆者の国・紀州(教育学部・海津一朗)
- 第9回 和歌山の方言(教育学部・澤村美幸)
- 第10回 紀州の鉱山の歴史(経済学部・長廣利崇)
- 第11回 わかやまに歌い継がれた音楽(経済学部・遠藤史)
- 第12回 和歌山県農業展開史(食農総合研究教育センター・岸上光克)
- 第13回 和歌山の在日コリアン(教育学部・西倉実季)

紀州地域の文化財—館藏品・寄託品展— 第1期特集：和歌山県師範学校郷土室の世界

2020年6月25日(木)から7月31日(金)まで学内の方に向けて、常設展「紀州地域の文化財—館藏品・寄託品展—」第1期を開催しました。本学では、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、学生および教職員以外の方には入構をご遠慮いただいていることから、本常設展は感染対策を十分配慮したうえで、学内者への限定公開として開催しました。またすこしでも多くの方々に本展をご覧いただけるよう、展示室および展示品をスライドショーで公開しています。(和歌山大学公式YouTubeチャンネル)



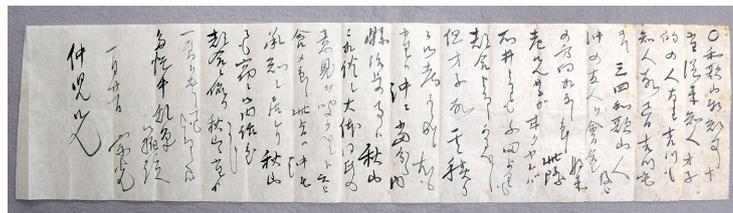
常設展動画はこちら

特集：和歌山県師範学校郷土室の世界

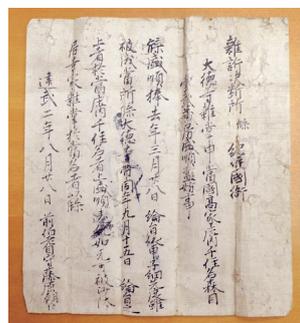
紀州経済史文化史研究所では、紀州地域に関連するさまざまな貴重資料を所蔵しています。そのなかには本学教育学部の前身である師範学校時代の教育史資料「(和歌山県)師範学校旧蔵資料」も多数保存、保管されています。また、その資料のなかには師範学校郷土室・女子師範学校郷土研究室が所蔵していたと考えられる資料も存在しています。郷土室および郷土研究室は、戦前の郷土教育運動に基づいて創設され、教職員や学生が和歌山県下の「郷土資料」つまり地域の歴史や自然に関係する資料(標本・古文書・古写真・絵葉書等)を収集していました。今となつては戦前の和歌山を知るための重要な資料となっています。こうした師範学校旧蔵資料は本学の当研究所、図書館、教育学部の各教室に分散して保管されてきました。当研究所はこれら資料のうち、古写真と絵葉書を保管して参りましたが、教育学部日本史教官室(旧渡辺広研究室)で保管されていた古文書の移管されるにあたり、公開いたしました。



おもな展示資料



児玉仲児宛陸奥宗光書状(明治25年[1892]頃)



雑書決断所牒(写)(建武2年[1335]8月28日)



研究所では師範学校郷土室の所藏品目録にあたる『本校郷土室目録』(昭和9年[1934]刊行)と照合し、上記の資料が本書に掲載されていることから、これら資料が戦前の師範学校郷土室で貴重資料とされていたことが明らかになりました。

(吉村旭輝)

2020年度

企画展

亜米利加へ、加奈陀へ—遺物と記憶から振り返る移民と和歌山

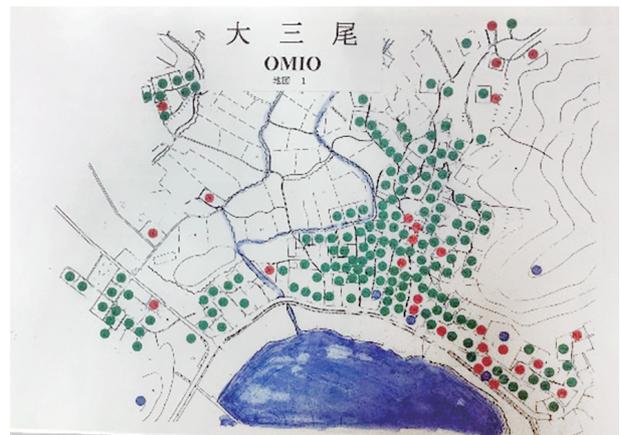
会 期／2020年10月16日[金]～11月5日[木]
 (ただし、西5号館において改修工事が予定されているため、会期が変更される場合があります。その場合は、ホームページなどでお知らせします。)

入 場／無料
 開館時間／10:30～16:00
 休 館 日／日・祝日・図書館休館日

会 場／本学紀州経済史文化史研究所展示室(西5号館3階)
 ※和歌山大学公式YouTubeチャンネルでも公開
 公開期間／2020年11月6日[金]～2021年3月31日[水]



写真：『三穂の浦人』(2007年)水田浩司氏らがまとめたもの。三尾村(現美浜町大字三尾)の大三尾から移民をだした家の在所在が緑色の円で示されている。(公財)和歌山県国際交流協会蔵



明治元年に日本人が集団的にハワイやグアムに契約移民として渡航してから150年以上を経た。現在、世界の日系社会は、約380万人(2017年現在推定数^{*})とも推定され、初期移民たちが相互扶助のために設立した郷村会を起源とする県人会も世界各地に存続している。一方、日本人海外移民に関して、長年、研究者によるさまざまな研究が発表されているものの、移民卓越県においても、移民の歴史を知る人々は限られた世代となりつつあり、移民をめぐる記憶や遺物の消失が進んでいることから、それらの保存と継承は急務とされてきた。

このような現状を鑑み、本研究所では、2009年より、特に和歌山の移民送出地域に焦点をあて、展示を通して世界各地への移民の歴史を取り上げてきた。また、地域において移民史の調査を行う、あるいは世界各地に暮らす和歌山にルーツを有する人々との交流を継続している

機関や団体、ならびに移民の歴史を残し伝えようという思いを有する人々と連携してきた。

今回の展示では、和歌山と深くかかわる個人の遺物や記憶から、亜米利加(アメリカ)へ、加奈陀(カナダ)へと渡航した和歌山県出身者の足跡をたどり、和歌山県移民史を捉えてみようとするものである。展示内容は大きく2つのコーナーで構成する。コーナーⅠは、「亜米利加へ」向かった人々に焦点を当て、コーナーⅡは、「加奈陀へ」向かった人々に焦点を当てる。いずれのコーナーにおいても、1. 移民送出の背景(歴史)、2. 太平洋戦争時の日系人(収容所の生活)、3. 戦後から現在(県人会、周年記念式典や交流)を取り上げる。和歌山県と渡航先を往来した人々やその関係者が有する遺物や記憶を通して和歌山県移民史の一端を伝えたい。

(東 悦子/移民研究・英語教育)

※公益財団法人海外日系人協会 <http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/> (2020/09/08)

主 催／和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 紀州経済史文化史研究所
 共 催／太地町教育委員会 美浜町 那賀移民史懇話会 NPO法人日ノ岬・アメリカ村
 後 援／(公財)和歌山県国際交流協会 わかやま南北アメリカ協会

※本研究は平成30年度科学研究費助成事業(課題番号:18K11777)「移民県和歌山における移民をめぐる記憶と遺物の保存と継承(東悦子代表)」によるものである。

information

2020年度

特別展 助左衛門家五代記—高橋家と木ノ本村—(仮)

会 期／2020年11月17日[火]～12月18日[金]
 会 場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所 展示室(図書館3階)
 入 場／無料
 開館時間／10:30～16:00
 休 館 日／土・日・祝日(図書館閉館日は閉館)



[左] 高橋博士理化学奨励賞メダル(和歌山中学校)
 [右] 弔辞(農学博士鈴木梅太郎)

和歌山城より少し離れた木ノ本村は江戸時代から商品経済が発展した近郊農村にあたります。昭和前期、ビタミンAを発見した高橋克己は、当村の出身で和歌山市の「偉人・先人」のひとりです。克己の祖父・助一郎は村会議員を務めた地方名望家で、父・二郎は地域で織布会社を起し、朝鮮半島への資本投下にも関与する産業資本家でもありました。また、克己の直ぐ下の弟潤二郎は工学部(京都大学)出身ですが、青年期には哲学や美学、社会科学の書籍を多数購入し読書している「インテリ」、文化人でした。

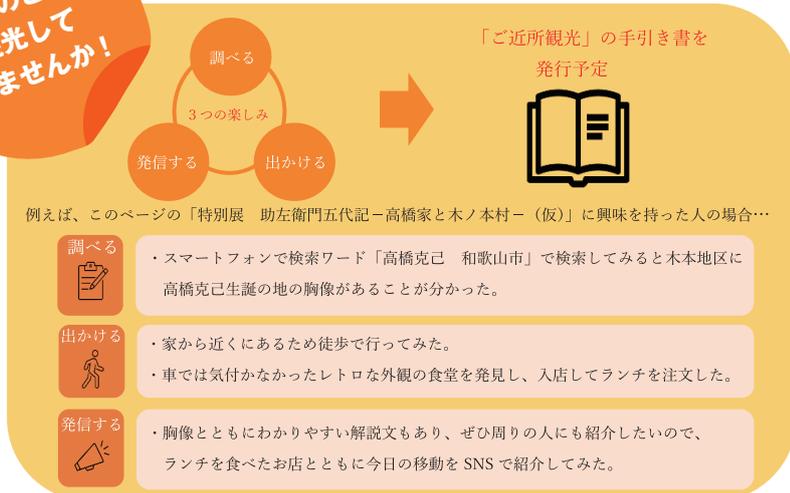
この高橋家には江戸期から明治期にかけての木ノ本村の記録・文書が保管されてきました(半分以上は県立文書館が所蔵)。また克己の末弟・進氏は『和歌山市史』編

さん事業にも関与した郷土史家であり、これらの古文書や古記録を使って、木ノ本村の歴史や高橋家の歴史をまとめたこともあります。この高橋家の江戸期四代の歩みを小説にしたのが有吉佐和子の『助左衛門四代記』にあたります。

研究所では、克己関係に限らず、高橋家の五代にわたる諸記録や写真・絵葉書、書籍、海外雑誌等広範な分野の記録類の寄贈を受けています。本展では近世の助左衛門、近代の助一郎と二郎、そして克己三兄弟に関する記録・文書・記念物・書籍等を公開いたします。本展をとおして戦前日本社会の科学・文化を担う人材はどこから、どのような環境から生まれたのかを知る糸口となると考えています。

(担当: 吉村旭輝)

あなたのご近所、
観光してみませんか!



- ご近所を楽しむことで…
- 3つの楽しみで観光需要を喚起できる
 - ご近所の楽しさを発信できる
 - 観光消費回復に貢献できる

和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹と和歌山市は、ポスト／ウィズコロナ社会における観光意識の変化を調査するとともに、市民による市内観光の需要を喚起する新たな観光モデルの策定に向け、実践的研究を行っています。

新たな観光モデルでは、「観光スポットを巡る」「体験する」「買い物をする・食べる」などの観光地に「出かける」楽しみに加えて、「調べる」こと自体を楽しむ、そして、実際に

出かけて感じたことや感動を友人・知人に共有してもらうため「発信する」ことも楽しむ、この「3つの楽しみ」を「ご近所」で体験することを提案します。

また、「ご近所観光」の手引き書を発行の予定です。今まで通り過ぎていた場所や名前だけ聞いたことがあるという人物を少し調べてみることで、何気なく過ぎていたご近所の風景が少し変わってくるかもしれません。